

在に伝わる主要な競技優勝者に関する最後の情報であるとし、それ以降はオリンピック斜陽の時代であったとの対し、本書では四世紀の優勝者について記されている新史料（一九九四年出土）を取り上げ、最末期においてすらオリンピックは往年の国際性、ゼウス神崇拜の側面を失ってはいなかったとしている。

そして第二点としては、このようなヘレニズム時代以降のオリンピックをネガティブに捉える視点の背景を、近代オリンピックとの関係性の中から探っているという点が挙げられよう。すなわち、近代オリンピックは、フェアプレーとアマチュアリズムの精神という二本柱の模範を古代オリンピックに求めた。そのため、選手のプロ化が進行し、競技をめぐるのは賄賂も交わされていたヘレニズム時代以降のオリンピックを排除し、古典期のオリンピックのみを理想化して受け入れた。しかし実際には、古典期の選手であっても、優勝者には賞品以外のかたちでの富と権力が集中していたという点ではプロの選手であったし、富と権力ゆえの取引も行なわれていた。これらのことから「古代オリンピックの精神」なる

ものは、「近代の創造」に過ぎないと指摘しているのである。

以上のように本書は、古代オリンピックについての単なる啓蒙的な知識を提供するにとどまらず、近代オリンピックに対する問いかけも行なうことによって、近代スポーツを観る際の新たな視点も示唆している。それと同時に、古代ギリシアに理想を求めてきた近代における古代ギリシア史研究を省みる機会も提供してくれるといえよう。

（新書版 二二二頁 二〇〇四年七月

岩波書店 七四〇円＋税）

（阿部拓児 京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

荒松雄著

『中世インドのイスラム遺蹟』

—— 探査の記録 ——

近年、中世インドのイスラム（ムスリム）諸王権の建造物に関する研究が盛んになってきている。中世インド史の碩学、荒松雄氏の手になる本書もそのような流れを大きく推進するものである。

氏は、これまでにデリー・サルタナットやムガル帝国期のデリーについて多くの研究を公にしてきたが、本書の特徴は、主にデリー以外の諸地域の中世イスラム建築物を対象として、その特徴と歴史的意義を考察している点にある。そして特筆すべきは、従来の内外の研究書に比較して、後掲の表に見られるように極めて多くの遺蹟写真を取載していることである（各遺蹟につき平均二枚以上）。また、各写真に英文タイトルを付け、巻末に参考文献一覧と用語解説を付録するなど海外の研究者や入門者にとっても有用な書となっている。本書の元になった遺蹟調査は、著者が中心になって行なった一九五九―六〇年の東京大学インド史蹟調査団のそれであり、一部は一九七一年に実施された調査である。対象遺蹟は、城砦、モスク、墓廟、スーフィー（イスラム神秘主義者）聖廟、水利施設（貯水池、井戸等）等であり、今日すでに消滅し、本書にのみ残る遺蹟も少なくないと思われる。本書は、表に見られるように、遺蹟調査地別に五つの章に分けられ、各章は、一、各地域の初期ムスリム諸王朝の略史、二、遺蹟探査紀行、三、各遺蹟の特徴の順に記

述されている。遺蹟探査紀行では、インド考古調査局や各地の研究者のさまざまな利便の供与も得て、著者たちが興奮しつつ調査を遂行していくさまが率直に述べられている。

序章では、デリーについての著者のこれまでの研究成果を簡潔に紹介し、アジメー

ルのモスクについても付言している。また、デリー・サルタナットを帝国とみなすことは無理であり、したがってデリーと各地のムスリム王権との関係を「中央」と「地方」の関係でみるべきでないこと、建造物に関するかぎり、「地方」が「中央」を凌駕している場合も少なくないと指摘してい

本書収載遺蹟写真数（309-471頁）

	遺蹟所在地	写真の数	小計
デリー	デリー	65	75
	アジメール	10	
北インド	ゴウル	24	144
	バーンドウア	31	
	シャウンブル	60	
	サーサラーム	16	
	バナールス	8	
	アッラーハーバード	5	
中央インド	ダール	10	74
	マーンドゥー	60	
	グワリオル	4	
デカン、南インド	ダウラターバード	22	275
	アウランガーバード、フルダーバード	46	
	ゴールコンダ	40	
	ハイダラーバード	7	
	ビーダル	58	
	ゲルバルガ	32	
	ビジャープル	49	
	アフマドナガル	21	
西インド	アフマダーバード	109	109
パーキスターン、アフガニスターン	ムルターン	9	48
	ラーホール	13	
	タッタ	15	
	カーブル	2	
	ガズナ（ガズニー）	9	
	合 計		725

る。第一章では、北ベンガルのゴウルとバーンドウアの遺蹟の彩色煉瓦建築の魅力が紹介され、同地のアーディーナ・マスジッド（モスク）が南アジア最大の面積をもつことや、ジャウンプルのモスクの主室前面の、古代エジプトの遺蹟を思わせるパイロンの壮大さも強調される。第二章では、ダールとマーンドゥーの遺蹟にはデリーの遺蹟との親近性があることや、ヒンドゥー神殿から転用した資材が列柱として利用されている例があることが指摘される。第三章では、ビーダルの建築に見られるベルシア文化の影響やビジャープルの建築に見られる壮大さ（ゴール・ゲンバズなど）と脆弱なまでの繊細さの共存が紹介される。第四章では、アフマダーバードのモスクや墓建築は地方的伝統美の極致であり、ヒンドゥー教やジャイナ教の神殿の柱その他の資材を転用している例も少なくないことを指摘している。第五章では、現在のパーキスターンやアフガニスターンには、スーフィー聖廟をのぞいて、デリー・サルタナット期の遺蹟はほとんど残存しないことや、スフラワルデイー派の煉瓦造りの華美な聖廟とその背景等について述べる。

本書の記述から、一三世紀頃だけでなく一五、一六世紀のムスリム諸王国においても既存のヒンドゥー教やジャイナ教の神殿の資材のイスラム建築への転用が意外と多いという印象を受けたが、この理解は著者の意図に沿っているだろうか。ここでは不十分にしかふれられなかったが、中世インドのイスラム建築の多様性を本書の豊富な写真とその解説によって味わってほしい。

なお、「インド・イスラム史跡——東洋文化研究所附属東洋学情報センター所蔵写真資料データベース」が公開されており有用であるが、その解説は主として本書での解説の要約であり、写真には若干出入りがある。

(注) たゞね (南インド) Mehرداد Shokoohy 2003: *Muslim Architecture of South India*, London. (テリーのトングデルカーベール) Mehرداد Shokoohy & Natalie H. Shokoohy 2003: 'Tughluqabad, third interim report', *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 66-1, pp.14-55. やゑ第一号「一次の中間報告」は同誌 57-3 (1994), pp.516-550 やゑ62-3 (1999), pp. 423-461. (トカン・フン・ハム) Phillip B. Wagoner & John H. Rice 2001: 'From Delhi to the Deccan:

Newly Discovered Tughluq Monuments at Warangal-Sultanpur and the Beginning of Indo-Islamic Architecture in Southern India', *Artibus Asiae*, 61-1, pp.77-117. (マシヤール) Elizabeth Lambourn 2001: 'A Collection of Merits ...': Architectural Influences in the Friday Mosque and Kazaruni Tomb Complex at Cambay, Gujarat', *South Asian Studies*, 17 4-45 M. and N. Shokoohy, 2000: 'The Karao Jami' Mosque of Diu in the Light of the History of the Island, *South Asian Studies*, 16, pp.55-72.

(B5版 x x 四七一、五二頁

二〇〇三年二月 岩波書店 三三七〇〇円)

(長崎県立大学教授)